

山口県立大学看護学部

小野善郎

和歌山県子とも 障害者相談センター

文献

- 1 Aman MG, Singh NN, Stewart AW, Field CJ
Psychometric characteristics of the aberrant
behavior checklist Am J Ment Defic 89(5),
492-502, 1985
- 2 林 隆, 木戸久美子, 中村仁志 知的障害
者の行動障害特徴とその原因となる環境要
因についての分析 (第一報) 知的障害入所施
設で使用されている精神科関連薬剤に関す
る調査 山口県立大学看護学部紀要 第9号
2004年 (印刷中)
- 3 中山 浩 知的障害児入所施設における精神
医療的対応の実態調査とその検討, 児童青年
精神医学とその近接領域, 42(1), 57-65, 2001
- 4 Ono Y Factor validity and reliability for the
Aberrant Behavior Checklist-Community in a
Japanese population with mental retardation Res
Dev Disabil 17(4), 303-9, 1996
- 5 小野善郎 精神遅滞者における向精神薬の使
用状況, 精神医学, 42(7), 697-703, 2000
- 6 小野善郎 異常行動チェックリスト日本語版
を用いた施設入所精神遅滞児 者の行動障害
の評価, 発達障害研究, 19(2), 168-178, 1997
- 7 障害者福祉研究会編 国際生活機能分類-国
際障害分類改訂版- 中央法規, 2002

F 健康危険情報

なし

G 研究発表

論文発表

- 1 Hayashi T, Kido K, Nakamura H, Mihara H
Actual condition of use of anti-psychotic drugs in
institute for people with intellectual disabilities

Proceedings of 16th Asian Conference on Mental
Retardation 781-782, 2003

- 2 林 隆, 木戸久美子, 中村仁志 知的障害
者の行動障害特徴とその原因となる環境要
因についての分析 (第一報) 知的障害入所施
設で使用されている精神科関連薬剤に関す
る調査 山口県立大学看護学部紀要 第9号
2004年 (印刷中)
- 3 木戸久美子, 林 隆, 中村仁志, 藤田久美,
芳原達也 知的障害をもつ子どもの性に関す
る親の意識についての研究 - 親と子とも
の性差による研究 - 発達障害研究 (印刷中)

H 知的財産権の出願・登録状況
なし

知的障害者入所施設における問題行動についてのアンケート調査

以下の設問に対し、最も近い項目の番号に○をつけるか、下線に数字をお書き下さい
アンケートに回答していただいているあなたについてお尋ねします。

- 1 性別 1 男 2 女
- 2 年齢 1 20歳代 2 30歳代 3 40歳代 4 50歳代
5 60歳代 6 70歳代
- 3 職種 1 看護職 2 指導員 3 管理職
- 4 資格 1 看護師 2 保健師 3 心理士 4 社会福祉士
5 精神保健福祉士 6 その他(具体的に)
- 5 経験年数 1 5年未満 2 5歳～10年未満 3 10歳～15年未満 4 15歳～20年未満
5 20歳～25年未満 6 25歳～30年未満

あなたの施設についてお尋ねします

- 6 施設種別 1 知的障害者更生施設 2 知的障害者授産施設 3 知的障害児施設
- 7 定員 入所 _____名 通所(テイサーヒスを含む) _____名
- 8 総利用者 入所 _____名 通所(テイサーヒスを含む) _____名
- 9 利用者の性別 男 _____名 女 _____名
- 10 利用者年齢

6歳未満 _____名	6歳以上12歳未満 _____名	12歳以上18歳未満 _____名
18歳以上20歳未満 _____名	20歳以上30歳未満 _____名	30歳以上40歳未満 _____名
40歳以上50歳未満 _____名	50歳以上60歳未満 _____名	60歳以上70歳未満 _____名
70歳以上80歳未満 _____名	80歳以上 _____名	

11～30に示す薬剤は平成12年に調査した山口県の施設別使用薬剤の内頻度の多い物を頻度順に並べています。使用薬の施設における現在の入所利用者についての実数を教えて下さい。

薬品名(商品名)	薬効種別	使用者数
11 カルハマセピン (テグレートール)	抗てんかん剤	_____名
12 ハロヘリール (セレネース、リントン、ハロステン)	フチロフェノン系精神安定剤	_____名
13 ハルフロ酸ナトリウム (デパケン、デパケンR、セレニカR、バレリン、ハイセレニン、エPILEナート)	抗てんかん剤	_____名
14 レボメプロマンノ (レボトミン、ヒルナミン)	フェノチアノン系精神安定剤	_____名
15 ヒヘリテン (アキネトン、タスマリン、ヒカモール)	抗パーキンソン剤	_____名
16 フェントイン (アレビアチン、ヒダントール)	抗てんかん剤	_____名
17 ノアセハム (セルロン、ホリゾン、ダイアノブ、セレナミン)	マイナートランキライザー	_____名
18 クロルプロマンノ (コントミン、ウインタミン)	フェノチアノン系精神安定剤	_____名
19 スルヒリト (トグマチール、スルピリド)	ヘンサミト系抗潰瘍 精神安定剤	_____名
20 チオリタンノ (メレリル)	フェノチアノン系精神安定剤	_____名
21 ヘゲタミン錠-A -B (ヘゲタミンB、ヘゲタミンA、ヘゲタミン)	精神神経用剤	_____名
22 クロナセパム (リボトリーール、ラントセン)	ヘンノアセヒン系抗てんかん剤	_____名
23 フルニトラセパム (ロヒプノール、サイレース)	睡眠及び麻酔導入剤	_____名
24 ノデヒン (ロトピン、ロンゾピロン)	チロヒン系精神分裂病治療剤	_____名
25 ニトラセパム (ヘンザリン、ネルボン)	ヘンノアセヒン系催眠剤	_____名
26 フェノハルビタール (フェノバル、フェノバルビタール、ルミナール)	催眠 鎮静 ハルビノール酸系抗てんかん剤	_____名
27 ユチノラム (デパス、パルキン)	チエノアセヒン系精神安定剤	_____名
28 フロヘリンアンノ (ニューレプチル、アパミン)	フェノチアノン系精神安定剤	_____名
29 ノニサミト (エクセグラン)	ヘンスイノキサノール系抗てんかん剤	_____名
30 塩酸プロメタンノ (ヒヘルナ、ピレチア)	フェノチアノン系抗ヒスタミン 抗パーキンソン剤	_____名

31～49に示す問題行動に対する薬剤使用の実態と問題行動についての国際生活機能分類(ICF)に基づく評価を以下の手順に従って回答して下さい。31～49の調査項目はAman & Singh, 小野によるAberrant Behavior Checklist-Community (1985 1994 1996)によるものを改変したものです。

ABCでは31～49に示す問題行動に対する薬剤適応、効果、副作用についてお尋ねします。特定の個人についてではなく、一般的に標記の行動についての考えをお聞かせ下さい。Aで1 2 3 4と回答した方のみB、Cを回答して下さい。パーセントは回答基準の大まかな目安です。

A 問題行動の内容に対する薬剤使用の適応について 以下の基準で評価し番号に○をつけて下さい。

- | | |
|-----------------------|---------|
| 0 = 薬剤使用の適応とはならない | 0-4% |
| 1 = わずかに薬剤使用の適応となる | 5-24% |
| 2 = かなりの割合で薬剤使用の適応となる | 25-49% |
| 3 = 向々に薬剤使用の適応となる | 50-95 |
| 4 = 完全に薬剤使用の適応となる | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | |
| 9 = 非該当 | |

B 設問Aで1 2 3 4を選択した場合 その効果について 以下の基準で評価し番号に○をつけて下さい。

- | | |
|---------------|---------|
| 0 = 薬剤の効果はない | 0-4% |
| 1 = わずかに効果がある | 5-24% |
| 2 = かなり効果がある | 25-49% |
| 3 = 高率に効果がある | 50-95 |
| 4 = 完全に効果がある | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | |
| 9 = 非該当 | |

C 設問Aで1 2 3 4を選択した場合、副作用の頻度と程度について、以下の基準で評価し番号に○をつけて下さい。

- | | |
|------------------|---------|
| 0 = 薬剤の副作用はない | 0-4% |
| 1 = 軽度の副作用がある | 5-24% |
| 2 = 中等度の副作用がある | 25-49% |
| 3 = 高度の副作用がある | 50-95 |
| 4 = 完全に薬剤の副作用がある | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | |
| 9 = 非該当 | |

DEFの質問項目は日本語として一部理解し難い表現もありますが、世界保健機構(WHO)が2001年に国際生活機能分類(ICF)として制定した世界共通用語で、国際比較統計を行うためのものですので了承下さい。D心身機能、E活動と社会参加について、F環境要因についての詳細は別紙資料を参照下さい。特定の個人についてではなく、一般的に標記の行動についての考えをお聞かせ下さい。パーセントは回答基準の大まかな目安です。

D 心身機能 標記の問題行動の背景に存在する心身機能障害の関与の度合いについて番号に○をつけて下さい。

- | | | |
|------------|------------------------------|---------|
| 0 = 問題なし | (問題行動の原因として心身機能の障害は関与しない) | 0-4% |
| 1 = 軽度の問題 | (問題行動の原因として心身機能の障害がわずかに関与する) | 5-24% |
| 2 = 中等度の問題 | (問題行動の原因として心身機能の障害がかなり関与する) | 25-49% |
| 3 = 重度の問題 | (問題行動の原因として心身機能の障害が高度に関与する) | 50-95 |
| 4 = 完全な問題 | (問題行動の原因として心身機能の障害が完全に関与する) | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | | |
| 9 = 非該当 | | |

E 活動と社会参加 標記の問題行動が活動と社会参加を困難にさせている度合いについて番号に○をつけて下さい。

- | | | |
|------------|---------------------------|---------|
| 0 = 問題なし | (問題行動が活動と社会参加を困難にさせない) | 0-4% |
| 1 = 軽度の問題 | (問題行動が活動と社会参加をわずかに困難にさせる) | 5-24% |
| 2 = 中等度の問題 | (問題行動が活動と社会参加をかなり困難にさせる) | 25-49% |
| 3 = 重度の問題 | (問題行動が活動と社会参加を高度に困難にさせる) | 50-95 |
| 4 = 完全な問題 | (問題行動が活動と社会参加を完全に困難にさせる) | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | | |
| 9 = 非該当 | | |

F 環境因子 標記の問題行動の発現に対し 環境因子の及ぼす影響の度合いについて番号に○をつけて下さい。

- | | | |
|------------|------------------------|---------|
| 0 = 問題なし | (問題行動発現に環境因子は影響しない) | 0-4% |
| 1 = 軽度の問題 | (問題行動発現に環境因子がわずかに影響する) | 5-24% |
| 2 = 中等度の問題 | (問題行動発現に環境因子がかなり影響する) | 25-49% |
| 3 = 重度の問題 | (問題行動発現に環境因子が高度に影響する) | 50-95 |
| 4 = 完全な問題 | (問題行動発現に環境因子が完全に影響する) | 95-100% |
| 8 = 詳細不明 | | |
| 9 = 非該当 | | |

問題行動調査項目

31 自傷行為

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
L 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
I 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

32 他者、物への攻撃性(暴言や暴力)

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

33 場面に不適切な形で奇声や大声をあげる

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
L 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

34 ちょっとしたこと、怒りっぽく、かんしゃくを起こす。または泣き叫ぶ

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
I 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

35 抑うつ的な気分になりやすい

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

36 不活発で動きが乏しく、何もしないでじっとしたままにいる。

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

37 人から孤立し、活動に参加(反応)しない

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

38 引きこもって、他者とのかわりを持つのが困難である

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
L 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

39 情緒的反応の欠如(表情が変わらない、自発的に動かない)

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

40 常同行動(無意味な動作を繰り返す)

A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
I 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

41 奇異、奇妙な行動							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
42 落ち着きが無く、じっと出来ない。							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
43 場面に不適切な形で騒々しい							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
44 衝動的(考えずに行動する)							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
45 反抗的な態度をとり、指示や指導を無視する							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
46 気が散り易く、じっとできない							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
47 場面に不適切な形でしゃべりすぎる							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
48 同じことを繰り返す言う							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9
49 大きな声で独り言を言う							
A 薬剤適応	0	1	2	3	4	8	9
B 薬剤効果	0	1	2	3	4	8	9
C 薬剤副作用	0	1	2	3	4	8	9
D 心身機能	0	1	2	3	4	8	9
E 活動と社会参加	0	1	2	3	4	8	9
F 環境因子	0	1	2	3	4	8	9

ご協力ありがとうございました。

ご意見があればお書き下さい

この冊子はアンケートに回答いただくための大切な資料です。

以下に国際生活機能分類 ICF 第2レベルまでの分類を踏まえ、「心身機能 body functions」、「活動と参加 activities and participation」、「環境因子 environmental factors」それぞれについて構成要素を示しています。アンケートの設問31～49のDEFを回答する際に、心身機能については以下の第1章から第8章まで、活動と参加については以下の第1章から第9章まで、環境因子については以下の第1章から第5章までを総合して評価して下さい。全く無関係な内容もありますか、アンケートを回答するのに不要な内容は無視して結構です。

国際生活機能分類 ICF についての詳細は <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html> に掲載されていますので、必要であれば参照して下さい。

「心身機能 body functions」

第1章 精神機能 mental functions

全般的精神機能 global mental functions

意識機能、見当識機能、知的機能、全般的な心理社会的機能、気質と人格の機能、活力と欲動の機能、睡眠機能など

個別的精神機能 specific mental functions

注意機能、記憶機能、精神運動機能、情動機能、知覚機能、思考機能、高次認知機能、言語に関する精神機能、計算機能、複雑な運動を順序立てて行う精神機能、自己と時間の経験の機能など

第2章 感覚機能と痛み sensory functions and pain

視覚および関連機能 seeing and related functions

視覚機能、目に付属する構造の機能、目とそれに付属する構造に関連した感覚など

聴覚と前庭の機能 hearing and vestibular functions

聴覚機能、前庭機能、聴覚と前庭の機能に関連した感覚など

その他の感覚機能 additional sensory functions

味覚、嗅覚、固有受容覚、触覚、温度やその他の刺激に関連した感覚機能など

痛み pain

痛みの感覚など

第3章 音声と発話の機能 voice and speech functions

音声機能、構音機能、音声言語(発話)の流暢性とリズムの機能、代替性音声機能など

第4章 心血管系 血液系 免疫系 呼吸器系の機能 functions of the cardiovascular haematological immunological and respiratory systems

心血管系の機能 functions of the cardiovascular system

心機能、血管の機能、血圧の機能など

血液系と免疫系の機能 functions of the haematological and immunological systems

血液系の機能、免疫系の機能など

呼吸器系の機能 functions of the respiratory system

呼吸機能、呼吸筋の機能など

心血管系と呼吸器系の付加的機能と感覚 additional functions and sensations of the cardiovascular and respiratory systems

その他の呼吸機能、運動耐容能、心血管系と呼吸器系に関連した感覚など

第5章 消化器系 代謝系 内分泌系の機能 functions of the digestive metabolic and endocrinesystems

消化器系に関連する機能 functions related to the digestive system

摂食機能、消化機能、同化機能、排便機能、体重維持機能、消化器系に関連した感覚など

代謝と内分泌系に関連する機能 functions related to metabolism and the endocrine system

全般的代謝機能、水分 ミネラル 電解質バランスの機能、体温調節機能 内分泌腺機能など

第6章 尿路 性 生殖の機能 genitourinary and reproductive functions

尿路機能 urinary functions

尿排泄機能 排尿機能、排尿機能に関連した感覚など

性と生殖の機能 genital and reproductive functions

性機能、月経の機能、生殖の機能、性と生殖の機能に関連した感覚など

第7章 神経筋骨格と運動に関連する機能 neuromusculoskeletal and movement-related functions

関節と骨の機能 functions of the joints and bones

関節の可動性の機能、関節の安定性の機能、骨の可動性の機能など

表1 改編異常行動チェックリスト

- サブスケールⅠ(易興奮性)
 - #1 自傷行為
 - #2 他者、物への攻撃性(暴言や暴力)
 - #3 場面に不適切な形で奇声や大声をあげる
 - #4 ちょっとしたこと、怒りっぽく、かんしゃくを起こす。または泣き叫ぶ
 - #5 抑うつ的な気分になりやすい
- サブスケールⅡ(無気力)
 - #6 不活発で動きが乏しく、何もしないでじっとしたままている。
 - #7 人から孤立し、活動に参加(反応)しない
 - #8 引きこもって、他者とのかかわりを持つのが困難である
 - #9 情緒的反応の欠如(表情が変わらない、自発的に動かない)
- サブスケールⅢ(常同行動)
 - #10常同行動(無意味な動作を繰り返す)
 - #11奇異、奇妙な行動
- サブスケールⅣ(多動)
 - #12 落ち着きが無く、じっと出来ない。
 - #13 場面に不適切な形で騒々しい
 - #14 衝動的(考えずに行動する)
 - #15 反抗的な態度をとり、指示や指導を無視する
 - #16 気が散り易く、じっとできない
- サブスケールⅤ(不適切な言語)
 - #17場面に不適切な形でしゃべりすぎる
 - #18 同じことを繰り返し言う
 - #19 大きな声で独り言を言う

表2 心身機能(ICF)をからみた問題行動の探索的因子分析

構造行列

	成分		
	1	2	3
情緒反応の欠如 無表情	968	507	404
引き籠もり・没交渉	942	611	320
常同行動	930	587	495
孤立 無反応	909	493	317
不活発 寡動	849	314	682
多動	824	396	704
奇異奇妙な行動	734	390	474
不適切にしゃべりすぎる	572	970	359
気が散りやすくしっと出来ない	533	966	499
同じことを繰り返し言う	578	907	222
反抗的態度 指示の無視	455	864	595
衝動性	404	841	649
大きな声で独り言を言う	419	808	273
怒りっぽい 癡癡 泣きわめく	338	183	892
自傷行為 心身機能	303	343	866
攻撃性	491	501	850
不適切な奇声・大声	726	495	835
不適切な騒々しさ	700	459	789
抑うつ気分	375	429	649

因子抽出法 主成分分析
 回転法 Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表3 活動と社会参加ICFからみた異常行動の探索的因子分析

構造行列

	成分		
	1	2	3
同じことを繰り返す言う	949	434	515
気が散りやすくじっと出 来ない	942	497	444
反抗的態度 指示の無視	929	448	474
大きな声で独り言を言う	922	505	511
衝動性	914	444	403
不適切な騒々しさ	903	451	421
不適切にしゃべりすぎる	877	277	333
不適切な奇声 大声	849	577	553
奇異 奇妙な行動	822	444	668
攻撃性	701	328	613
孤立 無反応	446	980	198
情緒反応の欠如 無表情	465	976	208
不活発 寡動	457	960	191
引き籠もり 没交渉	507	937	181
多動	541	863	109
常同行動	107	573	482
自傷行為	436	122	874
怒りっぽい 癩癩 泣きわ めく	751	327	789
抑うつ気分	577	-134	726

因子抽出法 主成分分析
回転法 Kaiser の正規化を伴うプロマクス法

表4 環境因子ICFからみた異常行動の探索的因子分析

構造行列

	成分		
	1	2	3
衝動性	943	269	552
気が散りやすくじっと出 来ない	933	391	485
奇異 奇妙な行動	930	438	573
不適切な騒々しさ	927	263	488
不適切にしゃべりすぎる	909	469	389
反抗的態度 指示の無視	909	449	458
同じことを繰り返す言う	870	497	749
大きな声で独り言を言う	761	385	668
孤立 無反応	476	939	501
引き籠もり 没交渉	437	934	353
不活発 寡動	309	895	600
常同行動	357	879	325
多動	420	834	430
情緒反応の欠如 無反応	275	795	473
不適切な奇声 大声	520	424	937
怒りっぽい 癩癩 泣きわ めく	504	459	931
攻撃性	741	354	894
自傷行為環境因子	350	498	877
抑うつ気分	706	400	817

因子抽出法 主成分分析
回転法 Kaiser の正規化を伴うプロマクス法

図1 入所施設で使用される精神関連薬剤の実態

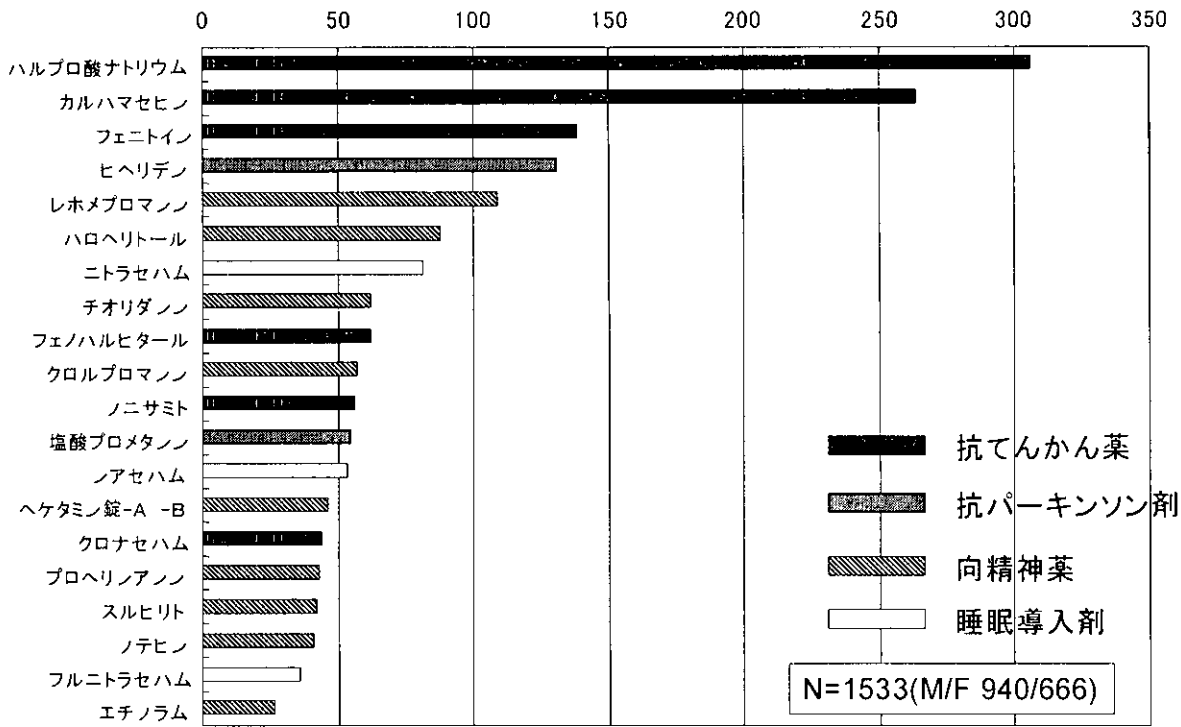


図2 問題行動別にみた抗精神病薬の適応、効果、副作用

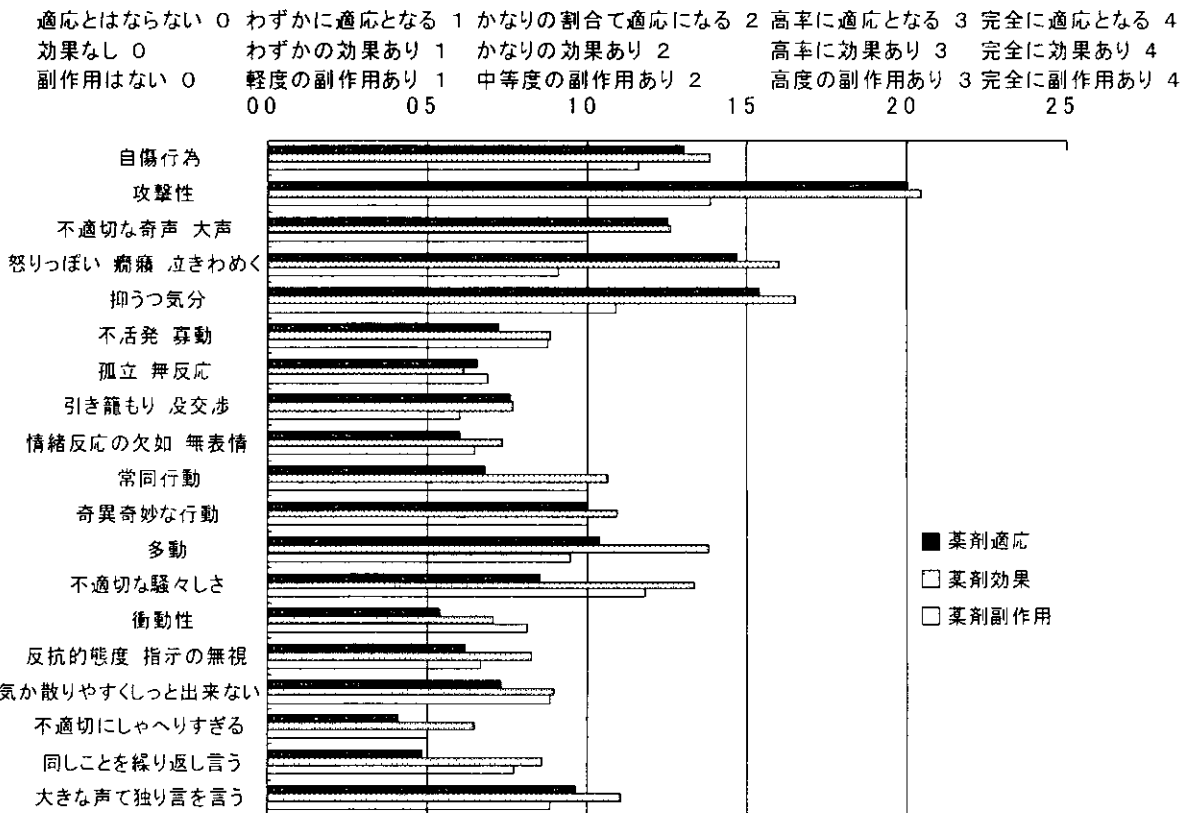
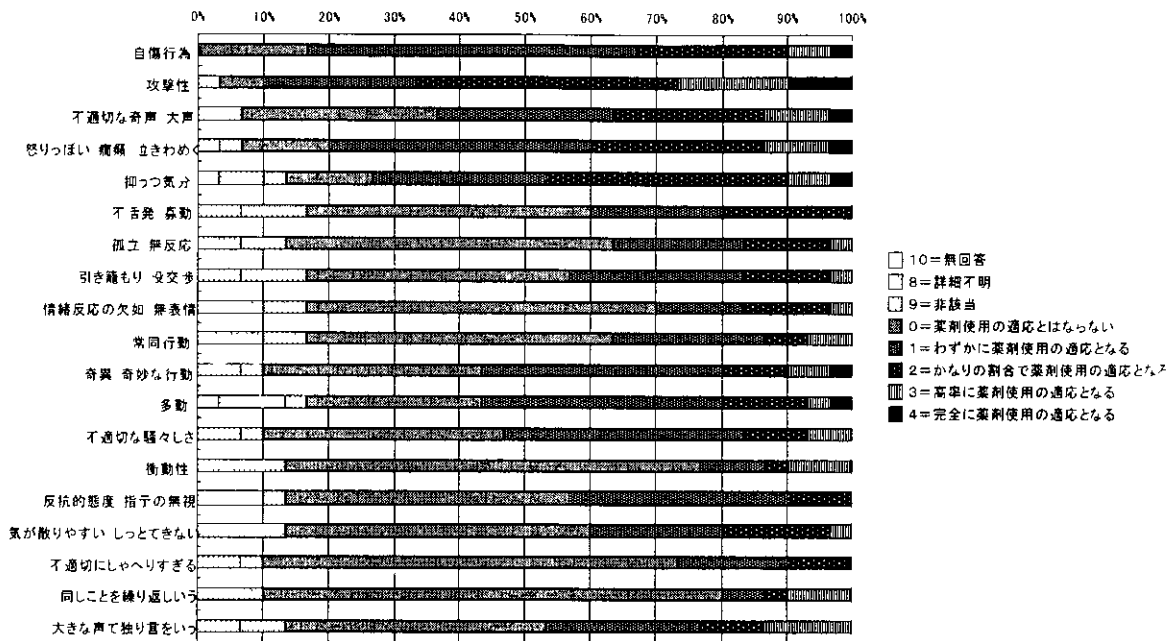
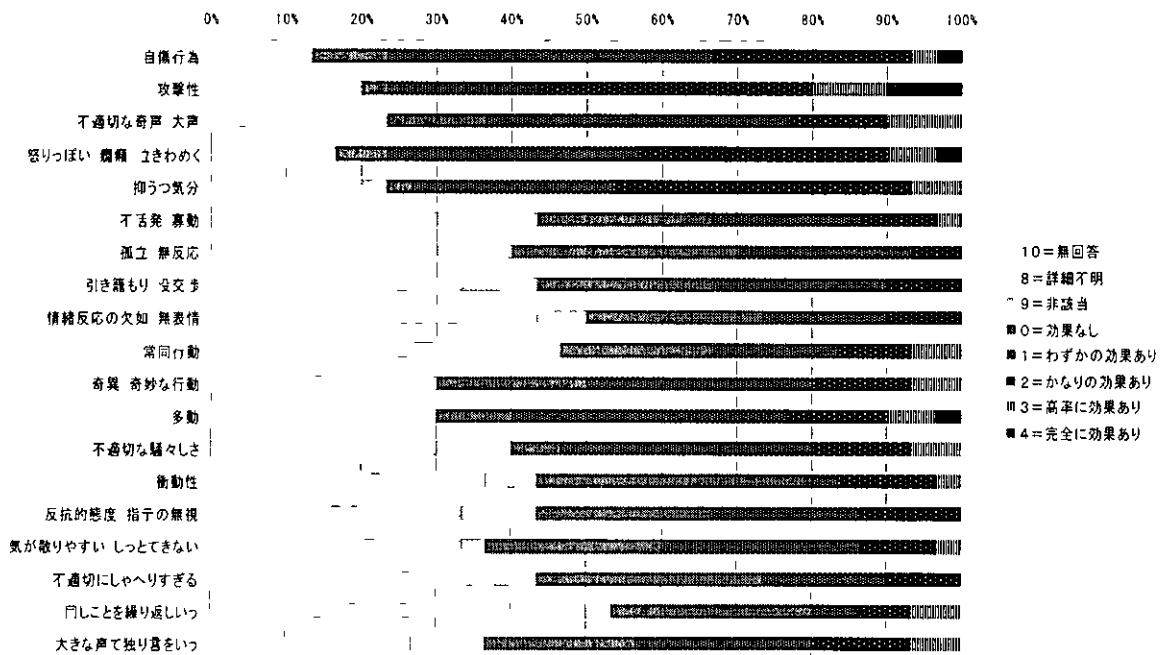


図3 異常行動と薬剤適応



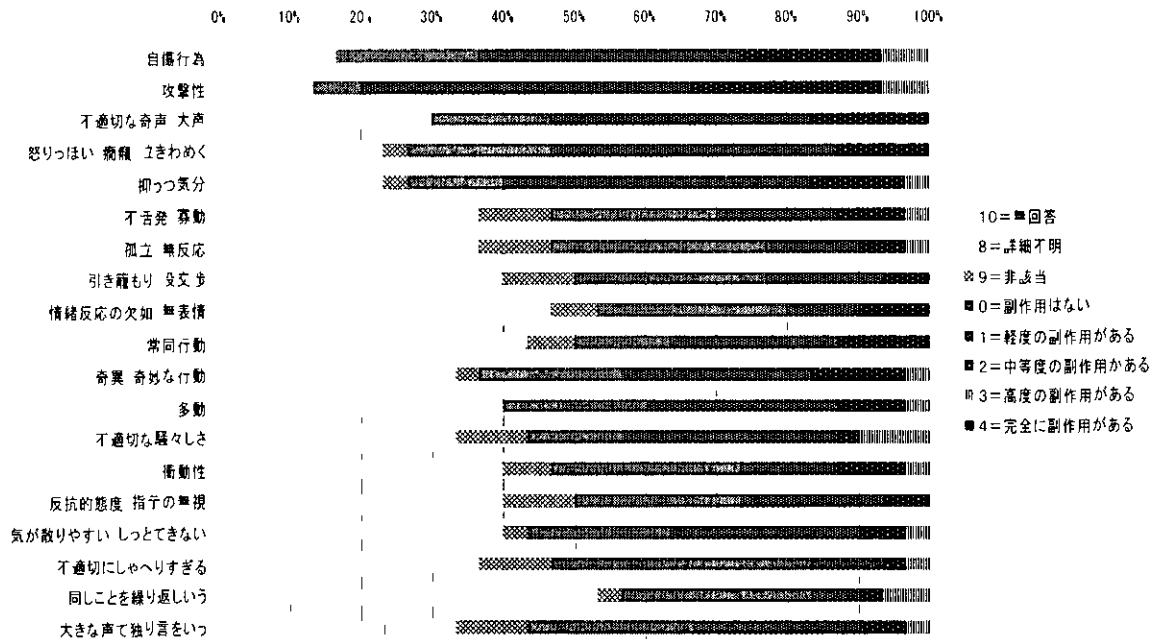
n=30施設

図4 異常行動と薬剤効果



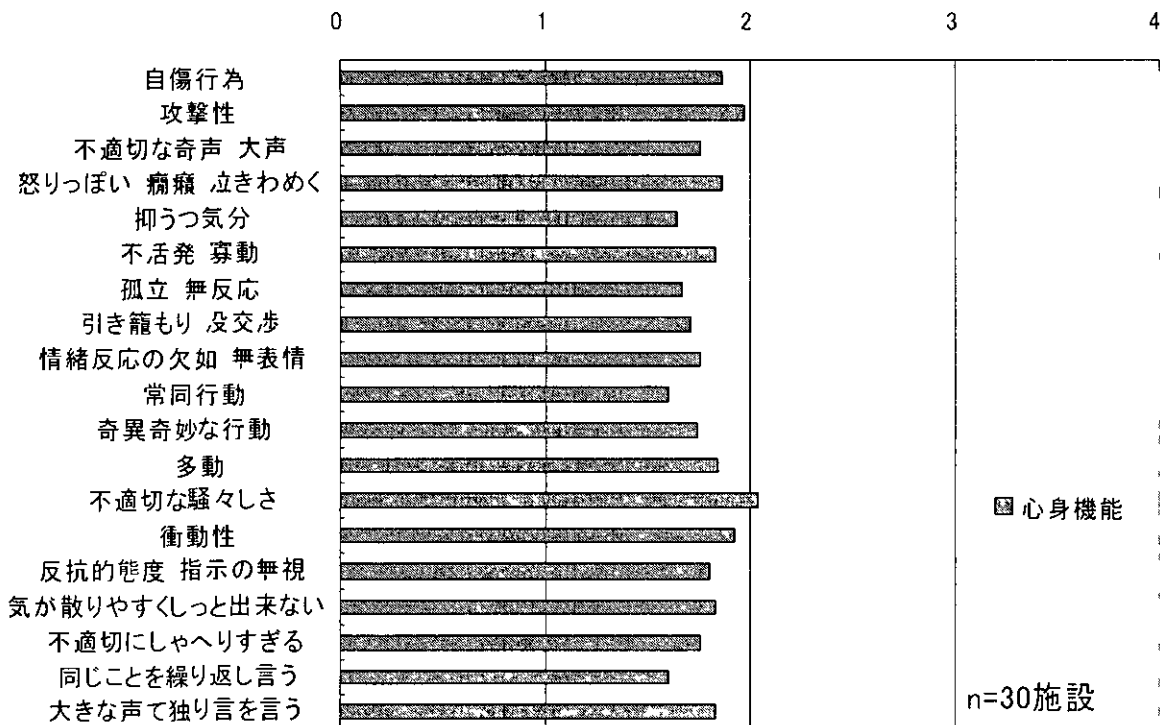
n=30施設

図5 異常行動と薬剤副作用



n=30施設

図6 問題行動の背景に存在する心身機能障害の関与の度合い



n=30施設

図7 標記の問題行動が活動と社会参加を困難にさせている度合い

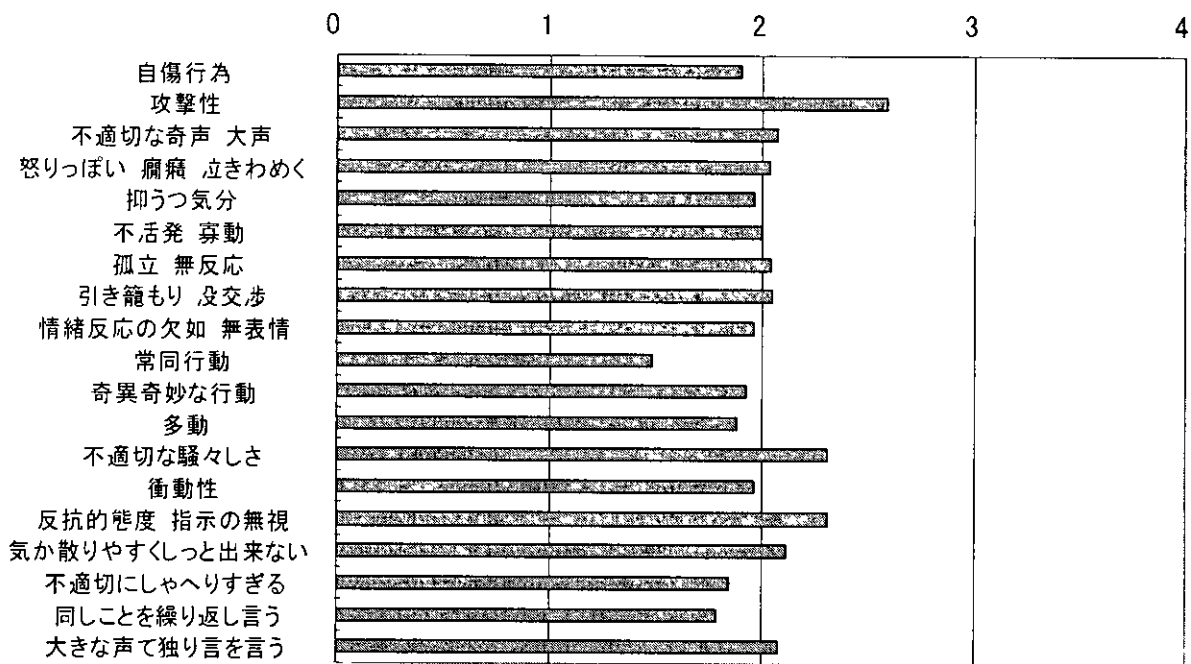


図8 環境因子の及ぼす影響の度合い

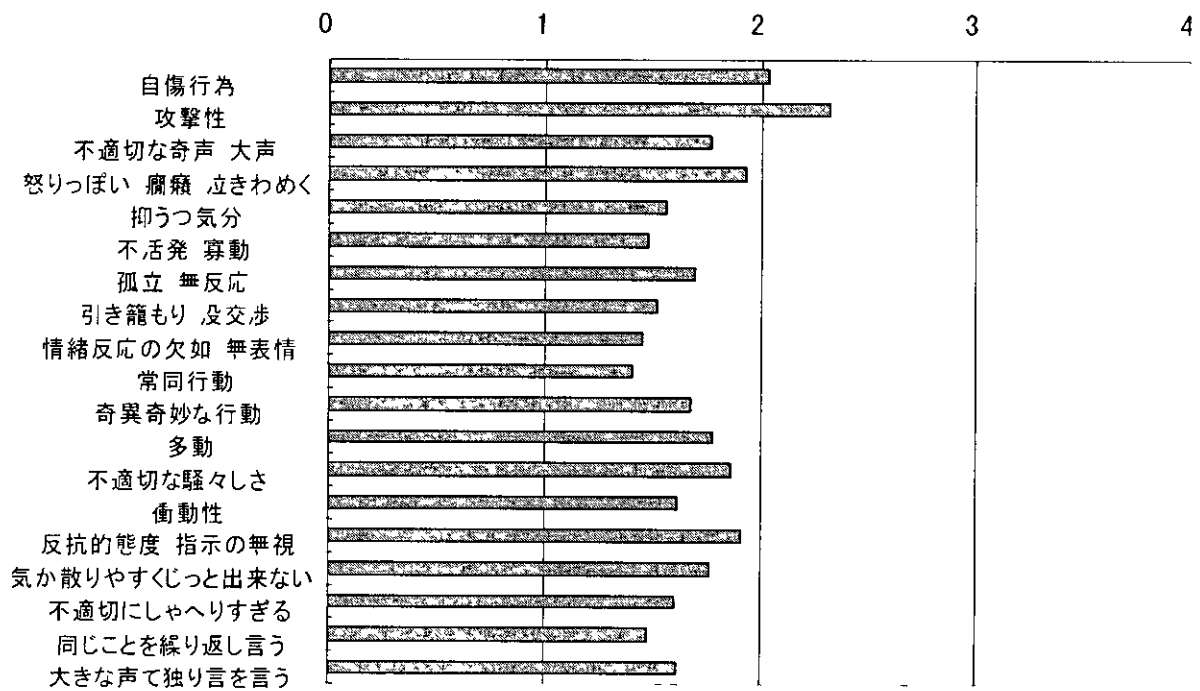
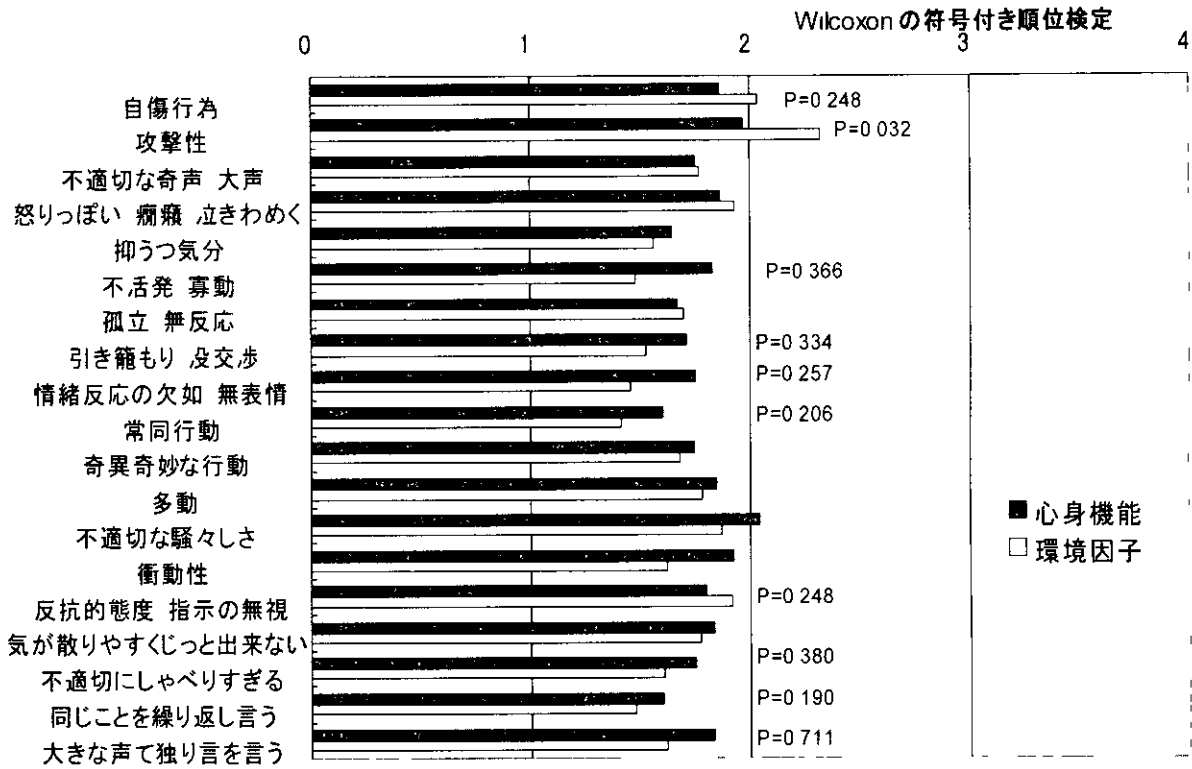


図9 異常行動に与える影響環境因子と心身機能



Ⅱ. 分担研究報告

- 4 知的障害者の社会参加を妨害あるいは促進する要因の解明
～知的障害養護学校から雇用への移行に関する全国実態調査～

田中敦士

厚生労働科学研究費補助金(障害保健福祉総合研究事業)
分担研究報告書

知的障害者の社会参加を妨害あるいは促進する要因の解明
～知的障害養護学校から雇用への移行に関する全国実態調査～

分担研究者 田中敦士
琉球大学 教育学部 障害児教育講座 助教授

研究要旨

社会参加の具体的なイメージとして就業を取り上げた 全国すべての知的障害養護学校卒業生の進路状況、支援体制のほか、就業してきた者と入所施設に入所した者の心身機能、活動と社会参加、環境要因を評定、比較することで、どのような要因か就業と入所施設という処遇における差をもたらしたのかを分析した 心身機能、活動と社会参加、環境要因を評定には、将来的に国際比較をも可能にすることを想定し、世界共通言語であるWHOのICF(国際生活機能分類)を用いた 質問紙調査により、227校から回答が寄せられた(回収率50.2%) 進路状況について、所属先は、一般企業(22.52%)、通所授産(20.16%)、小規模作業所(19.41%)の順であった 生活形態は、家族と同居が大半で、入所施設もまた1割を超えていた クループホームはわずか0.69%に過ぎず、家族負担の軽減、地域生活への移行支援等が今後の急務であると考えられた 1校あたりの進路指導担当教員は平均4.89人いるが、週20時間以上学校外で活動できる教員はその5分の1に過ぎず、多大な校内業務負担が職場 実習先開拓や就職支援のための時間を圧迫し、就職率や定着率低下の一因であることが示唆された ICFの比較について、評価基準で平均2得点を超えた項目は、就業者では皆無であった 一方、入所者では心身機能で1項目、活動と社会参加で10項目あった これら11項目が、就職か入所かを分ける重要な要因になっていることが示唆された 今回は環境因子のスコアが総してどれも低かった これはICFの分類が馴染み難く、教員が回答に際してイメージしにくかったことにも起因すると考えられた

A 研究目的

知的障害養護学校高等部卒業生の就職率は、年々下落傾向にある 文部科学省の特殊教育資料によれば、2001年3月卒業生の就職率はわずか25.5%であった 一方、福祉施設等に入る者が56.7%と最も多くなっている たとえ、就職きても長続きせず離職に至るケースが少なくない 就職できない生徒については、やむをえず在宅か入所施設かを選ぶケースが多い その要因としては、グループホームなど地域生活のための社会資源が乏しいことなどがあげられる

厚生労働科学研究「知的障害者の社会参加を妨げる要因の解明とその解決法開発に関する研究」班では、以下の2つの目的で全国調査を行った

①知的障害のある生徒が、養護学校卒業後に社会参加するうえで、現在どのようなことが障害要因になっているのか、を明らかにする

②どのような解決策や支援策が大局的に求められているのか、を明らかにする

その際、得られる結果の一部は将来的に国際比較をも可能にすることを想定し、世界共通言語であるWHOのICF(国際生活機能分類)を用いて評定すること

とした

本調査では、社会参加の代表例として就業を取り上げた 養護学校卒業後に、就業してきた者と入所施設に入所した者について、ICFの各次元を評定するその評定を比較することで、どのような要因か就業と入所施設という処遇における差をもたらしたのかを明らかにする 本報告では、この調査データの概要を紹介する

B 研究方法

1 対象

全国の養護学校高等部および高等養護学校合計451校における進路指導主事に調査への回答を依頼した 記人は原則として進路指導主事か行うか、事例など細かい評定が必要な部分もあることから、必要に応じて他の教諭か回答してもよいこととした

2 手続き

郵送法による質問紙調査とし、平成15年2月10日に調査票を発送し、同年3月10日を締め切りとした

調査項目は、進路状況、進路指導体制、ICF比較、自由記述の4分類から成る

①進路状況

平成14年3月末卒業生の平成14年4月現在の進路状況について回答を求めた 文部科学省では毎年進路状況を調べて特殊教育資料等で発表しているか、この統計では日中活動の場と生活の場か混合しているため、本調査では「所属先」と「生活形態」とに分けて詳しく質問した

②進路指導体制について

進路指導担当(兼任を含む)の教員数、学校外活動の自由度(週平均20時間以上学校外で自由に動ける教員数)、フォローアップ(職場訪問 定着指導)の実施状況について質問した 養護学校卒業生の就職率や定着率が低い原因として、進路指導担当教諭が学校内業務に追われ、職場開拓や定着支援があまりできないという現場からの指摘が多いため、その検証としてこの項目を設けた また、平均して卒業後何年後までフォローアップを継続しているか回答を求めた 現在文部科学省が検討している個別移

行支援計画においては、卒業後3年間までの計画策定を想定しているか、この実行可能性を考えるための資料とするため現状を尋ねた

③ICF比較

昨年度(2002年3月末)卒業生のなかから、「一般企業、事業所へ就職した卒業生」と「入所施設(更生または授産)へ入所した卒業生」について、各1名ずつ選ばせた との生徒を思い浮かべるかは自由とした 平成14年3月末時点での彼らの様子を想起してもらい、ICFの各次元について評定させた 「企業へ就職した卒業生」をAさん、「入所施設へ入所した卒業生」をBさんと名付けた

ICFについては、心身機能、活動と社会参加、環境要因の3つについて、大分類の項目ごとに評定させた

ただし、身体構造については、心身機能と明確に分類して現場教諭に評定させることは困難なことから、心身機能に含めて解釈させることとした

活動と参加については、ICFでは実行状況と能力の2つの評価点に分けている 能力の評価点は、ある時点で達成できることのできる最高の生活機能レベルを示すと定義されている

本調査では過去を振り返る形での評価であり、また評価者が一定でないことから、画一的 標準的な環境において評価することは困難である そのため、活動と参加については、実行状況の評価のみを採用することとした

なお、活動と参加の中の「教育」については、「家庭教育」、「学校教育」、「職業教育」の3つの中分類まで細かく評定させた 環境要因の中の「関係と支援」については、中分類まで詳細に評定させた 誰との関係や支援なのか、対策を考案するのに重要な情報となるためである

以上の各評定項目について、具体例を併記した ICFの表現だけでは非常に理解しにくく、回答に苦むことか予想されたためである

困難度などの評定基準については、ICFが示す基準をそれぞれ用いた このうち、環境要因は促進度と阻害度の両者を評定することになっている しかし、評定の複雑化を避けるため、「企業へ就職した卒業

生」には促進度のみを、「入所施設へ入所した卒業生」には阻害度のみを評定させた

C 結果と考察

1 回収率

全国の養護学校高等部および高等養護学校合計451校における進路指導主事に調査への回答を依頼した結果、227校から有効回答が得られた(回収率50.3%)

2 所属先と生活形態からみた卒業直後の進路状況

所属先は、一般企業(22.52%)、通所授産(20.16%)、小規模作業所(19.41%)の順であった(表1)生活形態は、家族と同居が大半で、入所施設もまた1割を超えていた。グループホームはわずか0.69%に過ぎず、家族負担の軽減、地域生活への移行支援等が今後の急務である(表2)

3 養護学校の進路指導体制

1校あたりの進路指導担当教員は平均4.89人いるか、週20時間以上学校外で活動できる教員はその5分の1に過ぎず、多大な校内業務負担か職場実習先開拓や就職支援のための時間を圧迫し、就職率や定着率低下の一因であることか示唆された(表3)就職後のフォローアップは約95%の学校か実施していた(表4)その平均期間は、永久と答えた3校を除いて2.97年であり(表5)、個別移行支援計画で卒業後3年間を想定するのは十分に無理のない期間であると考えられた

4 ICFによる就職者と入所者の比較

①心身機能の機能障害の程度

心身機能の機能障害の程度について、就職群(Aさん)と入所群(Bさん)で比較したものを表6に示したt検定の結果、全項目で就職群よりも入所群の方が機能障害の程度か有意に高かった。両群とも、「精神的な機能」か最も高く、次に「音声と発話」か高かった。項目ごとの順位は、就職群と入所群でほぼ同様の傾向であった。

ICFの評価基準では、2得点を中等度の機能障害と定義しているか、それを越えたのは、入所群の「精

神的な機能」のみであった(表6中の□参照)

②活動と社会参加の困難度

活動と社会参加の困難度について、就職群と入所群で比較したものを表7に示した。t検定の結果、全項目について就職群よりも入所群の方が、困難度は有意に高かった。入所群では、「経済生活」、「対人関係」、「コミュニティーライフ」、「基本的な人権」の順に高かった。

ICFの評価基準では、1得点を軽度の困難、2得点を中等度の困難と定義しているか、入所群では14項目中10項目か平均2点を超えていた(表7中の□参照)。一方、就職群で平均1点を越えたのは、「家庭での教育」のみであった。

このことから、活動と社会参加の項目か、就職か入所かを分ける重要な要因になっていることか示唆された。

③環境要因の促進度と阻害度

就職群の環境要因の促進度および入所群の環境要因の阻害度を表8に示した。

就職群では、「本人にとって影響力や権限を持つ立場の人との関係と支援」か促進度としてもっとも高く、教師の影響や支援力か就職にとって大きいことか明らかとなった。

入所群では、家族との関係とサポート(支援)か阻害度としてもっとも高かった。入所せざるを得なかった原因を、家族側のサポートの少なさに求めていることか明らかとなった。

ICFの評価基準では、1得点を軽度の促進/阻害因子、2得点を中等度の促進/阻害因子と定義しているか、就職群、入所群のいずれも平均2得点を超えなかった。

④全体的な比較

ICFの評価基準で平均2得点を越えた項目は、就職群では皆無であった。一方、入所群では心身機能で1項目、活動と社会参加で10項目あった。これら11項目か、就職か入所かを分ける重要な要因になっていることか示唆された。また、今回は環境因子のスコアか総してとれも低かった。これはICFの分類か馴染み難く、教員か回答に際してイメージしにくかったことにも起因すると考えられた。ICFを現場評価等で

役に立つツールとするためには、日本版の詳細な環境因子リストの開発が今後の課題であろう

D 結論

全国すべての知的障害養護学校卒業生の進路状況、支援体制のほか、就業してきた者と入所施設に入所した者の心身機能、活動と社会参加、環境要因を評定、比較することで、どのような要因が就業と入所施設という処遇における差をもたらしたのかを分析した。進路状況についてみると、所属先は、一般企業(22.52%)、通所授産(20.16%)、小規模作業所(19.41%)の順であった。生活形態は、家族と同居が大半で、入所施設もまた1割を超えていた。グループホームはわずか0.69%に過ぎず、家族負担の軽減、地域生活への移行支援等が今後の急務であると考えられた。

ICFの比較について、評価基準で平均2得点を超えた項目は、就業者では皆無であった。一方、入所者では心身機能で1項目、活動と社会参加で10項目あった。これら11項目が、就職か入所かを分ける重要な要因になっていることが示唆された。

E 健康危険情報

なし

G 研究発表

1 Tanaka A, Hosokawa T, Inagaki M. Causes of Institutional Residence or Employment among Graduates from School for the Intellectually Disabled, Analyzed with the ICF. ACMR 2003, 547-55

H 知的財産権の出願・登録状況

なし

表1 卒業直後の進路所属先

		(人)			
所 属 先		生 徒 数	平 均	標 準 偏 差	割 合 (%)
一	般 企 業	9 8 6	4 3 4	5 1 6	2 2 5 2
入	所 授 産	1 2 0	0 5 3	1 7 4	2 7 4
通	所 授 産	8 8 3	3 8 9	4 6 7	2 0 1 6
入	所 更 生	3 1 8	1 4 0	2 2 6	7 2 6
通	所 更 生	4 1 7	1 8 4	2 8 0	9 5 2
小	規 模 作 業 所	8 5 0	3 7 4	4 3 2	1 9 4 1
福	祉 工 場	9	0 0 4	0 2 2	0 2 1
職	業 訓 練 機 関	1 2 3	0 5 4	1 3 0	2 8 1
デ	ィ セ ン タ ー	1 5 8	0 7 0	1 9 4	3 6 1
グ	ル ー プ ホ ー ム	7	0 0 3	0 2 0	0 1 6
在	宅	2 0 9	0 9 2	1 6 0	4 7 7
進	学	7 3	0 3 2	1 0 6	1 6 7
そ	の 他	2 2 6	1 0 0	1 8 5	5 1 6
合	計	4 3 7 9	1 9 2 9	1 1 3 0	1 0 0 0 0

n = 2 2 7

表2 卒業直後の生活形態

		(人)			
生 活 形 態		生 徒 数	平 均	標 準 偏 差	割 合 (%)
家	族 と 同 居	3 6 0 9	1 5 9 0	1 0 1 8	8 3 1 0
入	所 施 設	5 0 9	2 2 4	3 1 3	1 1 7 2
ク	ル ー プ ホ ー ム	3 0	0 1 3	0 4 1	0 6 9
通	勤 寮	9 0	0 4 0	1 1 8	2 0 7
ア	パ ー ト 等 て の 単 身 生 活	7	0 0 3	0 2 0	0 1 6
社	員 寮 等	1 4	0 0 6	0 3 1	0 3 2
そ	の 他	8 4	0 3 7	0 9 9	1 9 3
合	計	4 3 4 3	1 9 1 3	1 1 4 7	1 0 0 0 0

n = 2 2 7

表3 進路指導担当教員数と学校外活動の自由度

		(人)			
		最 小 値	最 大 値	合 計	平 均 値
進	路 担 当 教 員 数	1	1 6	1 1 1 0	4 8 9
週	2 0 時 間 以 上 自 由 に 動 け る 教 員	0	1 0	2 2 7	1 0 0

n = 2 2 7

表4 職場訪問 定着指導の実施状況

フ オ ロ ー ア ノ プ		学 校 数 (校)	割 合 (%)
し て い な い		9	4 5 7
生 徒 に よ り 行 う 場 合 が あ る		4 3	2 1 8 3
全 員 に 対 し て 行 っ て い る		1 4 5	7 3 6 0
合 計		1 9 7	1 0 0 0 0

n = 1 9 7

表5 フォローアップ期間

	(年)			
	最小値	最大値	平均値	標準偏差
フォローアップ期間	0.3	1.0	2.97	1.38
	n = 185			

表6 心身機能の機能障害の程度

項目と具体例	就職群			入所群		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
1精神的な機能 (例)知的機能 欲求 睡眠 注意力 記憶 感情 言語 計算能力 攻撃性	192	1.08	0.55	166	2.08	0.93
2感覚機能と痛み (例)視覚 聴覚 味覚 触覚 痛覚 ハラノス感覚	190	0.22	0.51	163	0.98	1.07
3音声と発話 (例)発声機能 発話機能 発話のなめらかさとリズムの機能 歌唱機能	190	0.47	0.65	167	1.68	1.28
4心血管系 血液系 免疫系 呼吸器系 (例)不整脈 血圧異常 貧血 アレルギー反応 過呼吸 持久力	191	0.13	0.35	167	0.49	0.86
5消化器系 代謝系 内分泌系 (例)嚥下障害 よたれ 消化不良 肥満 脱水 体温コントロール不良	190	0.13	0.40	165	0.65	0.99
6尿路 性 生殖機能 (例)多尿 尿意切迫 月経の異常	189	0.03	0.16	163	0.48	0.96
7神経筋骨格と運動 (例)関節可動域の障害 片麻痺 筋緊張低下 チョク 常同行為 歩行障害	190	0.14	0.41	167	0.86	1.06
8皮膚および関連する構造 (例)光線過敏症 皮膚損傷 ケロイド形成 かゆみ 脱毛症 爪の異常	190	0.06	0.24	166	0.32	0.73

表7 活動と参加の困難度

項目と具体例	就職群			入所群		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
1学習と知識の応用 (例)注意して人の話を聞く まねる 読む 計算する 意思決定をする	191	0.99	0.71	167	2.13	1.03
2一般的な課題と要求 (例)課題や日課がてきる 危険を回避する ストレスに対処する	192	0.74	0.70	164	2.07	1.09
3他者とのコミュニケーション (例)言葉や意図を理解する 会話する 議論する ハソコンなどを利用する	191	0.87	0.73	166	2.16	1.11
4運動 移動 (例)しっとしてしている 動く 歩く ものを運ぶ 交通機関を利用する	191	0.31	0.55	167	1.63	1.29
5セルフケア(自分の健康管理) (例)手を洗う 髪や爪の手入れをする 排せつする 着替える 食へる 薬をのむ	192	0.35	0.58	166	1.47	1.29
6家庭生活 (例)必要なものを自分で買う 調理する 家事を手伝う 他者を手伝う	192	0.61	0.65	167	2.08	1.31
7対人関係 (例)相手と状況に見合った対応をする 相手を思いやる ひとに道をたずねる 家族との関係がよい 恋愛をする	192	0.90	0.82	167	2.40	1.19
8家庭での教育 (例)親や家族から適切なしつけや教育を受ける	191	1.05	1.06	159	1.82	1.31
9学校での教育 (例)学校に規則正しく通う 他の生徒と協調して学ぶ 与えられた課題を成し遂げる	192	0.47	0.57	167	1.77	1.23
10職業準備 (例)職場実習や就業体験などを適切にできる 就職に必要な課題をてきる	192	0.47	0.56	163	2.25	1.24
11経済生活 (例)金銭を使って買い物をする 自分で金銭管理をする	191	0.74	0.71	165	2.47	1.25
12コミュニティライフ(地域での生活) (例)学校外の地域行事に参加する 結婚式や葬式になとに出席して適切に行動する	178	0.88	0.78	153	2.35	1.28
13レクリエーションとカルチャー(余暇の過ごし方) (例)遊ぶ スーパーをする 読書をする 演劇や手工芸 趣味などをする	191	0.66	0.73	165	2.01	1.33
14基本的人権について (例)自己決定をする 権利を主張する	192	0.96	0.79	166	2.35	1.24